

震災復興で露わになつた行政の限界

日本水フォーラム
事務局長
竹村公太郎
Koitaro Takemura



徒弟制度の土木
土木技術は徒弟制度である。それは先輩への尊敬の念と、先輩の意見への服従である。

それは当然であった。土木の真剣勝負は現場である。土木現場は大学では学べない。予測不能な事態の連続で、それを乗り切る知恵と度量は、経験でしか得られない。少しばかり頭の良い若者の知恵では、決して現場は乗り切れない。私は大学を出て、鬼怒川の川治ダム建設現場に配属された。そこで先輩たちから様々な技術を徹底して学んだ。それだけではない。水没者への姿勢、酒席での身のこなしなどの全人格を学んだ。先輩たちは、経験の引き出しから自在

に知恵を取り出し、適確な対処を即座に取った。その先輩たちを尊敬し、その意見に従うことは当然であった。

還暦を過ぎた私も、その良き土木の先輩であろうとした。自分の経験は若い人に比べたら途方もなく多い。これらの経験から来た知恵を後輩たちに伝えていく。もちろん、その役割の自信もあった。

しかし、その自信が根底から揺らいでしまったのが、二〇一一年三月十一日の東日本大地震とその後に続く復旧・復興であった。

失格した土木技術者

従来、災害復旧の土木技術者たちは、災害後

はできなかつた。その制御ができなければ、復旧・復興の方針など出るわけがない。

東北各地の被災地に行くたびに、多くの人たちから意見を求められた。しかし、答えられなかつた。沈黙せざるをえなかつた。沈黙する土木技術者の先輩など、無用の長物である。3・11災害では、私は土木技術者の先輩としての資格を失った。

土木学会の討論会

二〇一三年秋から二〇一四年の一月にかけて、土木学会企画の震災復興フォーラムのトークサロンがあった。出演者は3・11の被災者やボランティア、若手の研究者たちであった。第二回では母親を3・11で失った若い女性写真家の話の後に、パネルディスカッションが開始された。被災地に入り復興で苦闘している研究者たちは、被災者たちの思いと画一的な復旧土木事業の落差を指摘していた。フロアーからも発言があった。被災地に入って地域の復興計画を模索している研究者であった。その言葉が、この大災害の復旧・復興の本質を突いていた。「現場では皆一所懸命だ。誰も悪い者などいない」であった。

その通りである。どの土木技術者の誰もが懸

念に復興に立ち向かっている。

災害復旧担当官は、防災施設を懸命に建設している。自治体は懸命に代替地造成に向かっている。道路事業者は懸命に道路復旧を進めている。下水道事業者は懸命に下水処理場復旧に向かっている。各分野の土木技術者たちは、自分の行政権限と責任の範囲で、最大限に予算をとる、最大限に早く工事を仕上げようと努力している。まさに、「現場では皆一所懸命だ。誰も悪い者などいない」。

しかし、個別の復旧事業や復興事業が進捗するにつれ、被災者たちの心と離れていくことになる。なぜなら、個別事業は個別行政の最適解であり、地域全体の最適解ではない。地域の歴史をいかに連続させるか。地域の文化をいかに復活させるか。地域の自然をいかに再生して、未来の地場産業を創生するか。このような問いかけは個別事業にはない。

縦割りの克服

各行政は自分の与えられた所管法律に依って立っている。この所管法律によって、実施すべき事業は厳密に規定されている。各行政の土木技術者は、この所管分野からはみ出して他の分野の事業に手を出すわけにはいかない。

の現場に立つ。自然によって破壊された現場に立って、過去の経験から災害復旧の段取りを考えていく。基本は原型復旧である。原型復旧は難しいことではない。予算の確保と、工事の段取りと、各組織の役割分担と人員配置を決めていく。災害復旧の不動の手法である。

ところが、3・11災害は決定的に過去の災害と異なっていた。あの巨大津波をテレビ中継で自分の目で見てしまった。災害の跡地に立って考えるのではない。巨大津波を脳裏に焼き付けたまま、復旧を考えていかなければならない。巨大津波の力を自分の頭の中で制御したうえで、復旧の方針を策定していく。そのような能力を備えた土木技術者はいるのか。少なくとも私は

平時には、この行政ルールは効率が良く、公平なルールである。しかし、3・11災害のような巨大災害の後、全面的な地域再建には絶対的に対応できない。個別行政は全体を見ない、いや、制度的に見ることができない。

地域全体の復興には優れたガバナンスが必要である。平時には地域リーダーの市町村長がその任に当たる、しかし、津波で壊滅状態になった基礎自治体にそれが出来るわけがない。それは基礎単位の自治体を統括する県知事の役目になるが、早く復興せよとのマスコミや政治家たちの叱咤の圧力を受けて、県は中央の縦割り行政の枠内で強引に事業を進めていくこととなる。土木技術者たちは、組織の指示に応じて努力する。それ以外の意見に耳を傾けていたら、事業が遅れるだけだ。事業が遅れば、「行政は遅い！」と袋叩きに遭う。土木技術者たちは自分の依って立つ行政と上部組織への忠誠心で一杯となる。この3・11復興では、土木界の徒弟制度と縦割りの弊害が露わに出ってしまった。

未来の日本列島には、必ず巨大地震が襲ってくる。その巨大地震の地域復興にいかに対処していくか、困難な問いかけだが答えはある。大災害が来る以前に、大災害を想定した事前復興計画を住民が議論しておくことだ。